

## “海街diary”での英語と日本語の比較

Comparison in Japanese and English language in film “Umimachi Diary”

Do Sung Kim (キム ドソン)

82-373 Structure of the Japanese Language

### 1. はじめに

言語にはそれぞれの特徴がある。言語によって構造や表現が違って、その違いは本や映画などの原文とそれについての翻訳で分かる。今度の日英比較プロジェクトのトピックは2015年に封切りした映画“海街diary”のせりふとそれについての英語の字幕の比較だ。“海街diary”の原作はもともと青春漫画だが、有名な是枝裕和監督によって映画化された。好評を博した映画の興行で、カンヌ国際映画祭にも招待された。二年前の夏にこの映画を見てから本当に良かったと思った。その楽しかった映画のせりふとそれについての英語の字幕を比較すると面白くて日本語と英語の比較の勉強になると思ってこのトピックを選んだ。このトピックについて調べるためにYoutubeにある映画のシーンとそれについての台本、そして授業で読んだ日英語の文化的見方の文献を使う。

### 2. 日英語比較

#### 例1

佳乃：もう10分すぎた。(It's already ten past)

幸：ばたばたしない。(Calm down)

幸：似合わない それ あんたには。(It's not your style)

佳乃：へえ ばば臭かった。(Was it old lady-like?)

幸：かってに着といてばば臭いてどうということ。(How dare you call it old lady-like?)

佳乃：どうということで…ね。(“How dare you call it” …right?)

幸：もっともっとちゃらちゃらしたのにしなさいよ。(Wear something more flashy)

まず、英語の翻訳は日本語のせりふよりもっと簡潔になっている。それに上の幸と佳乃の対話の二つの部分から日本語と英語の翻訳の違いが分かる。

日本語では音や動きを基にする副詞、あるいは擬声語、擬態語の使用が多い。英語には擬声語と同じものがないのでこのような日本語の表現の翻訳が難しくて違う感じを与えることもある。上の対話で幸が使った “ばたばた” や “ちゃらちゃら” はその例で、これについての英語の翻訳は動きの音の描写ではなく簡潔な表現 “calm down” と “flashy” を使っている。

なお、上の対話で幸と佳乃が服を描写するとき、二人は “臭い” という表現を使っている。“臭い” はもともと悪い匂いの意味だが、“面倒臭い” とか “照れ臭い” のような表現を見ると日本語では他の使い方があるようだ。上の対話での場合は、“らしい” の意味にもっと近いと思っている。一番正確な翻訳は “ババの匂いがする” と思っているが、不自然な言葉になる。だから、英語の翻訳でも “Old lady-like” を使って、“らしい” の意味を持っている。

上の二つの例を見ると、日本語はなにかを描写するとき人の感覚に焦点をあてているような気がする。なにかの音、匂い、見かけを使ってなにかを描写するのは英語にはほとんどないと思う。英語が一般的に状態を表現している時、日本語はもっと本質的な描写が入っているような気がする。

## 例2

佳乃：あの子やっぱり煮詰まってたよね。(She' d been keeping all her troubles to herself)

幸：いろいろあったから。見られかたがあんたそっくり。(She lived through a lot. She' s just like you when you' re drunk)

例2では、幸と佳乃が妹のすずについて話している。上の対話でも日本語と英語の違いがある。まず、ふつう日本語では状況に焦点をあてているが英語では人が文章の中心になる。上の幸のせりふをみれば、二つの文章の主語は “いろいろ” とか “見られ方” のように非人間を表す。しかし、英語の翻訳で二つの文章の主語は “She=すず”、つまり人になっている。この例を見ると英語の文章では日本語と違って人にはっきり言及しているようだ (Hinds, 1986)。

なお、日本語の認知パターンは婉曲的な発想法だが、英語は明確で一般的に非婉曲的だ (Monane & Rogers 1977)。辛い過去がある妹すずについて幸と佳乃は“煮詰まっていた”とか“いろいろあった”と言っている。この例を見ると日本語では表現がもっと間接的で散漫だ。つまり、状態についての十分な説明をしていないようだ。だから、追加的な説明がなければ状況の流れを理解するのが傍目に難しくなるかもしれない。しかし、英語の翻訳では、“keeping all her troubles” とか “lived through a lot” のように日本語よりもっと明確な説明をしている。だから、英語では妹のすずが過去に問題があったということがもっと分かりやすい。

上の日本語と英語の違いを見てから日本とアメリカの文化的な違いがあると思った。直接的な英語は本人が言いたい事をはっきり言うのが円滑なコミュニケーションになると思った。しかし日本語は間接的で散漫な言葉が多い。日本語が直接的じゃない理由は相手の気持ちを考える“思いやり”の文化があるかもしれない。アメリカとは違い日本では人の関係に上と下の分別がもっと確実だ。下の人は上の人に礼儀を守らなければいけないから話す時に敬語などを使う。それに人に迷惑をかけることが大事な日本社会で相手の気持ちを考えるのは当然だ。だから、相手の機嫌を損ねないように自分の本心を隠したり間接的に話したりする。恐らく日本人の本音と建前の違いはこの“思いやり”に由来したのかもしれない。この日本とアメリカの文化的な違いのため、お互いに疎通することはたぶん難しいだろう。

### 3. おわりに

映画“海街diary”から感じた日本語と英語の違いは、日本語は英語よりもっと本質的で人の感覚をよく使っていると思った。なにかを見るとき、対象の全体的な姿をみるのが東洋的な観点だと思っていたが、この映画のせりふではディテールな表現をよく使っているから面白いと思った。それに日本語は英語とは違い、人より状況に焦点をあてている。それから、日本語では相手への礼儀を守るために、あるいは話している人の気持ちを考えるために直接的な表現よりは間接的で散漫な表現をする。相手の気持ちを考える“思いやり”は日本特有のいい文化だと思うが、直接的な英語を使うアメリカ人とは全く違うことを見ると文化の違いは面白いと思う。